



真理求め 文学に没頭

元国連事務次長 明石康さん =1947年度卒

県立秋田高 7



県立秋田高編の最終回は元国連事務次長の明石康さん(87)＝1947年度卒＝です。在学当時は旧制秋田中でした。戦時下では勤労奉仕にかり出され、終戦で価値観が一変しました。「大人たちを信じていいのか」と批判的になり、真理を求めて文学や哲学、演劇にのめり込んだそうです。

【大槻英二】

県北部の扇田町(現大館市比内町)で生まれました。父は精米工場を営み、兄3人、姉1人の5人きょうだいの末っ子です。小学4年のとき、秋田中入学を自指して私だけ知人宅に身を寄せ、秋田市の築山小に転校しました。

秋田中への入学は43年です。真っ白なスポン姿の上級生が鉄棒で「大車輪」を演じたのに憧れ、体操部に入りました。ところが練習で手に、まめができて感覚がなくなり、転落して手首の筋を痛めました。

戦局の激化とともに勤労奉

仕にかり出され、製油所でドラム缶を転がしたり、松の木から松根油を取ったりしていました。いたずら好きで、友人と「高いところから水滴を落とすと、水蒸気になる」という話になったのです。そして、製油所の塔に上って放尿したら、通りかかった人が驚いて見上げていました。実験は見事に失敗でしたね。

あかし・やすし 1931年生まれ。東京大卒。57年日本人初の国連職員に。事務次長として広報、軍縮を担当、カンボジア暫定統治機構(UNTAC)と旧ユーゴスラビア問題担当の事務総長特別代表を務める。97年国連を退職。現在は国際文化会館理事長。近著に「カンボジアPKO日記」。座右の銘は「目は遠くを、足は地に」。

「米国とは物量に差がありすぎるから勝ち目がない」と冷めた見方をする同級生がいました。広島と長崎の原爆投下の際は「特殊爆弾」とされていましたが「原子爆弾に違

物の先生などが印象に残っています。

玉首放送は実家で聞きました。日本はどうなるのかと不安でいっぱいでしたが、次第に暗い日々は終わったという解放感を覚えました。ただ、昨日まで軍国主義を唱えていた大人が急に民主主義者になりました。「この人たちを信じていいのか」と、かなり批判的になりました。「真理とは何か」を自分なりに考えようと、日本文学だけでなくロシア文学のトルストイやドストエフスキー、哲学書や詩などを読みあさりました。演劇にも夢中になりました。校舎は白ペンキのしゃれた建物でしたが、戦後、進駐軍に接収され、その後火事で焼けてしまいました。

岩波英和辞典を編集した先生がいらっしゃるといので48年、旧制山形高に入学しました。ところが、独特な発音に驚きました。独学で英語を習得されたのですから仕方ありません。私も今もって秋田なまりのヘンな英語と言われますが……。しかし、国連に入ってから分りました。事務総長をはじめ、いろいろな国の人の英語に、なまりがある。米国や英国なまりの英語でなくとも、内容さえしっかりしていれば、みんなに意見を聞いてもらえるのです。

後輩には、日本に閉じこもることなく、積極的に海外へ出て、世界中に友人をつくらせてほしいですね。